

I 短歌集

敗戦・・・・・・・・・・一九四五年〜四六年

敗戦に先ずは笑みたるわが姉を 憎みて見れば子に頼ずりてあり

(八月十五日、近所の人数人が集まり、わが家で玉音放送を聞く)

(長姉は横浜・本牧で空襲で焼け出され、幼女を連れて疎開していた)

戦場に二児を送りしわが父は 玉音に佇ちつくす青桐のもと

(その夜、庭に出て慟哭する父を見た)

滅びたる国原てらす月冴えて 北支に戦死せる兄やさしかりき

(次兄は戦車兵となり、戦闘中地雷を踏んで爆死したという)

森に入り敗戦に哭くわれ尋(と)めきたり 諭したまえる英語の教師

(S先生は灯火管制下、「敵性語」の英語を個人教授してくれた)

銃執りし校庭(にわ)に繁れる桜木は 黒くしずみて敗戦に喪す

(軍事教練に明け暮れた校庭をさまよう)

冴えざえの星に桜木葉ずれしは 見果てし夢の嗚咽なるかや

西陽さす学校工場静まりて「尽忠報国」の四字虚脱して読む

敗戦を知らざる児らは城祉に 突撃ごっこをなおくり返しおり

復員(かえ)り行く一等兵が眼(まなこ)あげて 銃を片手に足取り堅きは何故ぞ

仏印に消息断ちしわが兄は　ビルマに征きしと戦友の告げたり

(行方不明だった長兄のこと、「仏印」は今のベトナムのこと)

いくさ熄み陸士の友が丸腰で　会いにきたるをかなしむべきや

(「陸士」は陸軍士官学校、職業軍人の養成校のこと)

胸を病み衰えて帰還(かえ)りしかの爺は　馬もおのれも徴用されし人

「満州にて父処刑」の報に号泣慟哭する　友を抱きて沼に遊べり

(親友Zの父は満州国高官だった)

沼の辺の葦原に佇つわが友の　この背の寂寞をいかにせんとす

焼け跡の横浜に還りゆくわが姉は　共産主義を研究せよと言ひ残したり

復員(かえ)りきし兄をば見ればさらぼいて　なお軍隊調の残るかなしき

(「行方不明」の長兄は3年後ビルマ戦線から「骨と皮」で復員した)

復員りきて闇屋して生きる兄助けんと　二十里の道自転車踏む

陸幼に陸士に行けと吾を責めし　かの配属将校いま釣糸垂るる

(「陸幼」は陸軍幼年学校、旧制中学、2年で受験できた)

洋モクをくゆらす敗け肥りめは昨日まで　国策会社の指導員なりき

ほの暗き電灯のもと感動す　洞窟に息吹く赤き中国

(上野の闇市を歩きし折、偶然にもエドガー・スノー著『中国の赤い星』を買う)

『中国の赤い星』読みて夜明くれば　われの心は「中国」に定まる

(兄たちは中国と戦ったが、弟の私は中国と仲良くする仕事をしたいと決心)